

第3章

スポーツキャリアパターンにみる

スポーツ開始時のきっかけと継続

スポーツを始めたきっかけ、及びその後の継続に影響を与えた要因について検討する。

以下、4つの視点で概観した。

- ①情報提供者→パラスポーツに関する情報を提供した人
- ②開始時重要他者→パラスポーツ開始時に重要な役割を果たした人
- ③開始場所→パラスポーツを始めた場所
- ④継続時重要他者→パラスポーツ継続時に重要な役割を果たした人

1. 情報提供者

パラスポーツ選手や学校外の仲間、学校関連の指導者、パラスポーツ指導者や競技団体関係者などが情報提供者になっていることが多かった。

1.1 年代別

情報提供者を年代別にみると、50～69 歳では、パラスポーツ関係者（パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど）が多かった。40 歳代では、パラスポーツ関係者（パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど）やメディアが多かった。

〈事例〉

①〈識別番号88〉50 歳代女性。聴覚障害（先天的障害）。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツは水泳で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、所属している障害者水泳クラブのメンバーが提供した。

②〈識別番号33〉60 歳代女性。二分脊椎症（先天的障害）。スポーツキャリアパターンは A5。

ソフトボールを障害のない人と一緒にやっていた。その後、パラスポーツとしてパラバドミントンを始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、パラバドミントンのチームメートであり、会社の同僚から入手した。

③〈識別番号15〉50歳代男性。左上肢機能障害。障害発生年齢は10歳代後半。スポーツキャリアパターンはB5。

障害発生前はバスケットボールをしていた。障害発生後、パラ水泳に出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、パラ水泳の指導者から入手した。

20歳代、30歳代では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)や学校関係者(教師や学校仲間など)が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号21〉30歳代男性。右上腕欠損(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA3。

当初は、障害のない人とバドミントンをしていたが、その後、パラバドミントンに転向して、国際大会にも出場した。パラスポーツに関する情報はパラバドミントンの指導者が提供した。

②〈識別番号95〉30歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は10歳代後半。スポーツキャリアパターンはB2。

障害発生前はスポーツを実施していなかった。障害発生後、パラ柔道に出会ったが、その後、パラローイングに転向した。パラスポーツに関する情報は、大学時代からの友人であるパラ柔道選手から入手した。

③〈識別番号89〉30歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA2。

ブラインドサッカーに出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、特別支援学校小学部在籍時の担任教員から入手した。

1.2 障害種別

情報提供者を障害種別にみると、脊髄損傷や二分脊椎症、切断や機能障害ではパラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)が多く、視覚障害では学校関係者(教師や学校仲間など)が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号82〉40 歳代男性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人とカヌーに取り組んでいたが、日本代表を目指すために、パラカヌーに転向した。パラスポーツに関する情報は、当時から交流のあったパラカヌー連盟の人から聞いた。

②〈識別番号1〉50 歳代男性。頸髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発生前は水泳をやっていた。障害発生後、ツインバスケットボールを始め、現在はパラ水泳に取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に通っていたリハビリテーションセンターの指導員から聞いた。

③〈識別番号91〉30 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ陸上で、その後も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校陸上部の先輩が提供した。

④〈識別番号34〉40 歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は、10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発生前はバスケットボール、バレーボール、柔道をやっていた。障害発生後、パラ柔道に出会った。現在はパラ柔道に加えて、柔術やグラップリングもしている。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校(盲学校)で入手した。

1.3 障害発生年齢別

情報提供者を障害発生年齢別にみると、0～5 歳では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)や学校関係者(教師や学校仲間など)、家族・親族が多かった。6～20 歳では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)やメディアが多かった。21 歳以上では、パラスポーツ関係者(パラスポーツ指導者やパラスポーツ協会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなど)が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号40〉30 歳代女性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツがパラ柔道で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、弟から聞いた。

②〈識別番号66〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳だった。現在は自転車競技に取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は母親が提供した。

③〈識別番号46〉20 歳代女性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツは車いすバスケットボールだったが、現在はボッチャに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校で聞いた。

④〈識別番号36〉40 歳代男性。右大腿半分が欠損。障害発生年齢は 32 歳。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前はスキーやスノーボードをしていた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に出会った義肢装具士が提供した。

⑤〈識別番号30〉30 歳代男性。片大腿切断。障害発生年齢は 21 歳。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はサッカーをしていた。障害発生後にパラ陸上に取り組んでいたが、現在はパラスノーボードに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に会った義肢装具士や切断パラリンピアン、通っていたリハビリテーションセンターから入手した。

⑥〈識別番号19〉60 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 23 歳。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前は野球をしていた。障害発生後、車いすバスケットボールに出会ったが、その後、車いすテニスに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、障害発生後に通っていたリハビリテーションセンターの理学療法士から聞いた。

2. 開始時重要他者

パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者、親・兄弟・祖父母、学校関連の指導者が開始時の重要他者になっていることが多かった。

2.1 年代別

開始時の重要他者を年代別にみると、20 歳代・30 歳代では、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者が多かった。多くの年代で、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。20 歳代では親・兄弟・祖父母、30 歳代では学校関連指導者が特に多かった。

〈事例〉

①〈識別番号4〉20 歳代男性。骨形成不全(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ卓球で現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、母親の友人であるパラ卓球関係者から入手した。パラスポーツを開始する際の重要他者は、母親に加えて、母親の友人であるパラ卓球関係者だった。

②〈識別番号68〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、都道府県パラスポーツ協会関係者から聞いた。パラスポーツを開始する際の重要他者は母親だった。

③〈識別番号75〉20 歳代女性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはチェアスキーだったが、現在は車いすカーリングに転向した。パラスポーツに関する情報は、当時のチェアスキーの指導者から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述のチェアスキー指導者と両親だった。

④〈識別番号40〉30 歳代女性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ柔道で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は弟が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、当時通っていた特別支援学校の体育教員と柔道部顧問だった。

⑤〈識別番号81〉30 歳代男性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはデフバレーボールで、現在は、デフ陸上とデフサーフィンに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時の特別支援学校高等部の教員が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者も、その教員である。

⑥〈識別番号27〉30 歳代男性。片下肢切断。障害発生年齢は 10 歳代中盤。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はサッカーをやっていた。障害発生後に、パラ陸上を始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害発生時に知り合った義肢装具士が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の義肢装具士と、当時通っていた高校(普通校)の体育教員だった。

2.2 障害種別

開始時の重要他者を障害種別にみると、脊髄損傷・頸髄損傷、二分脊椎などでは、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。切断や機能障害では、親・兄弟・祖父母、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関

係者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、義肢装具士や医師・看護師が多かった。脳性麻痺では、親・兄弟・祖父母が多かった。視覚障害は、学校関連の指導者やパラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号33〉60 歳代女性。二分脊椎症(先天性障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

ソフトボールを障害のない人と一緒にやっていた。その後、パラスポーツとしてパラバドミントンを始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、パラバドミントンのチームメートであり、会社の同僚が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者も前述のチームメートと、当時通っていた地域のバドミントンクラブのコーチだった。

②〈識別番号50〉30 歳代女性。多発性関節拘縮症(先天性障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

障害のない人と水泳をしていたが、途中からパラ水泳に転向、現在はパラバドミントンに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は障害者スポーツセンターから入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、兄と当時診察してくれていた医師だった。

③〈識別番号26〉40 歳代男性。片下肢切断。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はハンドボールをしていた。障害発生後、パラ陸上に出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時診察してくれていた医師と、義足の調整をしてくれていた義肢装具士だった。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の医師と、当時担当してくれていた看護師、義肢装具士だった。

④〈識別番号67〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天性障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、その後、ボッチャに転向した。パラスポーツに関する情報は、療育機関の指導者が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、母親と前述の療育機関の指導者、スイミングスクールの指導者だった。

⑤〈識別番号91〉30 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツは、パラ陸上で、その後も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校陸上部の先輩が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の先輩と、当時通っていた特別支援学校(小学部)の担任だった。

⑥〈識別番号47〉30 歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前には野球、バレーボール、陸上を行っていた。障害発生後は、パラ陸上とグランドソフトボールに取り組み、現在は、ゴールボールに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校の先輩から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、当時通っていた特別支援学校の指導者だった。

2.3 障害発生年齢別

開始時の重要他者を障害発生年齢別にみると、0～5 歳では、親・兄弟・祖父母、学校関連の指導者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者が多かった。6～20 歳では、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者やパラスポーツ団体関係者、学校関連の指導者、親・兄弟・祖父母が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号66〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、その後、自転車競技に転向した。パラスポーツに関する情報は母親が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者も母親だった。

②〈識別番号100〉30 歳代男性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人と軟式野球をしていたが、途中からデフバレーボールに転向した。現在は、デフビーチバレーボールに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は、当時通っていた特別支援学校(中学部)の

担任教員と、デフバレーボールの日本代表監督だった。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の担任教員だった。

③〈識別番号12〉40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラアーチェリーで、現在もパラアーチェリーを継続している。パラスポーツに関する情報は、当時放送していたテレビ番組から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、パラアーチェリー選手と、療育センターのセンター長だった。

④〈識別番号83〉60 歳代女性。右上腕欠損。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B1。

障害発生前はスポーツをやっていなかった。障害発生後、40 歳代前半に初めて取り組んだパラスポーツがパラ馬術で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は夫が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の夫と、海外のパラ馬術選手だった。

⑤〈識別番号53〉30 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前は柔道をしており、障害発生後にパラ柔道に転向し、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、ゴールボールの指導者が提供した。パラスポーツを始める際の重要他者は、前述のゴールボール指導者と、障害発生前から通っていた町の柔道場の指導者だった。

⑥〈識別番号39〉30 歳代女性。左下肢機能障害。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発症前はバレーボールをしていた。障害発生後、パラバドミントンに出会い取り組んでいた。現在は、シッティングバレーボールに取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は広報誌から入手した。パラスポーツを始める際の重要他者は、障害者スポーツセンターの指導員と母親だった。

3. 開始場所

学校スポーツ施設、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンター、スイミングクラブや道場などの民間施設、一般のスポーツ施設が開始場所になっていることが多かった。

3.1 年代別

開始場所を年代別にみると、20 歳代はスイミングクラブや道場などの民間施設、30 歳代は学校スポーツ施設、40 歳代は一般のスポーツ施設、50～60 歳代では、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンター、スイミングクラブや道場などの民間施設が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号94〉20 歳代女性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、現在もパラ水泳を継続している。パラスポーツに関する情報は、母が提供した。パラスポーツを開始した場所はスイミングクラブ、パラスポーツを始める際の重要他者も当時通っていたスイミングクラブ関係者と母であった。

②〈識別番号55〉20 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前は水泳をしていた。障害発生後、パラ水泳に取り組み始め、現在もパラ水泳をしている。パラスポーツに関する情報は、当時同じ高校の水泳部に在籍していた上肢欠損の選手が提供した。パラスポーツの開始場所はスイミングクラブ、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の上肢欠損の選手と妹だった。

③〈識別番号56〉30 歳代女性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人と柔道をしていたが、その後、パラ柔道に転向、現在もパラ柔道を継続している。パラスポーツに関する情報は、大学時代の柔道部の先輩が提供した。パラスポーツの開始場所も大学の柔道場、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の先輩だった。

④〈識別番号17〉30 歳代男性。下肢切断・機能障害。障害発生年齢は10 歳代後半。スポーツキャリアパターンはB5。

障害発生前は野球をしていた。障害発生後、車いすバスケットボールに出会い、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、インターネットで入手した。パラスポーツを開始した場所は特別支援学校の体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、車いすバスケットボールチームのメンバーだった。

⑤〈識別番号44〉40 歳代女性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA2。

初めて出会ったパラスポーツは車いすテニスで、現在はパラダイビングとパラ水泳に取り組んでいる。パラスポーツに関する情報は車いす利用者が提供した。パラスポーツを開始した場所は公共の体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の車いす利用者だった。

⑥〈識別番号24〉40 歳代男性。片大腿切断。障害発生年齢は10 歳代後半。スポーツキャリアパターンはB4。

障害発生前はバレーボールとスノーボードに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組んでいたが、その後、パラ陸上にも取り組むようになった。パラスポーツに関する情報は、雑誌や理学療法士、教員、義肢装具士から入手した。パラスポーツを開始した場所は、パラスノーボードはスキー場、パラ陸上は公共の陸上競技場、パラスポーツを始める際の重要他者は、理学療法士と義肢装具士だった。

⑦〈識別番号33〉60 歳代女性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA5。

当初は、障害のない人とソフトボールをしていたが、その後、パラバドミントンに取り組むようになり、現在もパラバドミントンを継続している。パラスポーツに関する情報は、勤務先の同僚でもあるパラバドミントン選手が提供した。パラスポーツを開始した場所は障害者スポーツセンター、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述のパラバドミントン選手と地域のバドミントンクラブのコーチだった。

⑧〈識別番号43〉50 歳代男性。片大腿離断。障害発生年齢は10 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB6。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、車いすバスケットボールを始め、その後、車いすテニスに転向、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は両親が提供した。パラスポーツを開始した場所は福祉体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、両親と車いすバスケットボールチームのメンバーだった。

3.2 障害種別

開始場所を障害種別にみると、脊髄損傷・頸髄損傷・二分脊椎などでは、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターが多かった。切断や機能障害では、一般のスポーツ施設、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンター、スイミングクラブや道場などの民間施設が多かった。脳性麻痺ではスイミングクラブや道場などの民間施設が多く、視覚障害では、学校スポーツ施設、スイミングクラブや道場などの民間施設が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号12〉40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラアーチェリーで、現在も継続している。パラスポーツに関する情報はテレビ番組から入手した。パラスポーツを開始した場所は障害者スポーツセンター、パラスポーツを始める際の重要他者は、パラアーチェリーの選手や療育センターの職員だった。

②〈識別番号19〉60 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、車いすバスケットボールに出会い、その後、車いすテニスに転向し、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、入院時のリハビリテーションセンターの理学療法士が提供した。パラスポーツを開始した場所はリハビリテーション病院、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の理学療法士、障害者スポーツ関係者だった。

③〈識別番号60〉20 歳代女性。左手指欠損(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

当初は、障害のない人とラグビーに取り組んでいたが、その後、パラスキーに転向、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害者スポーツを専門とする大学教授が提供した。パラスポーツを開始した場所は海外のスキー場、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の大学教授だった。

④〈識別番号37〉40 歳代男性。右上腕欠損。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前はバレーボールに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み始め、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、障害発生前に勤めていたアルバイト先の社長とその弟が提供した。パラスポーツを開始した場所はスキー場、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述社長とその弟、海外のスノーボード選手だった。

⑤〈識別番号68〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ水泳で、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、都道府県パラスポーツ協会関係者が提供した。パラスポーツの開始場所はスイミングスクール、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の都道府県パラスポーツ協会関係者と母親だった。

⑥〈識別番号79〉50 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

当初は、障害のない人とゴルフをしていたが、その後、パラ射撃に転向し、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は特に入手していなかった。パラスポーツの開始場所はゴルフ練習場、パラスポーツを始める際の重要他者は、ゴルフを一緒に行う従妹だった。

⑦〈識別番号86〉40 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A5。

当初は、障害のない人と卓球をしていたが、その後、グランドソフトボールに転向、現在も継続している。パラスポーツに関する情報は、当時在籍していた特別支援学校の担任教員が提供した。パラスポーツの開始場所は特別支援学校のグラウンド、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の担任教員だった。

⑧〈識別番号52〉20 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前はアイスホッケーや陸上競技に取り組んでいた。障害発生後、ゴールボールに出会い、現在もゴールボールを継続している。パラスポーツに関する情報は、ゴールボールの男子日本代表監督が提供した。パラスポーツの開始場所は、特別支援学校体育館、パラスポーツを始める際の重要他者は、前述の男子日本代表監督と女子日本代表監督だった。

4. 継続時重要他者

パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者、配偶者・パートナー・子ども、親・兄弟・祖父母、職場(雇用先)関係者、学校関連の指導者、障害のない友人や障害のないアスリートが継続時の重要他者になっていることが多かった。

4.1 年代別

継続時の重要他者を年代別にみると、20 歳代では親・兄弟・祖父母、パラスポーツ指導者や競技団体関係者が多かった。30 歳代では職場(雇用先)関係者、親・兄弟・祖父母、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。40 歳代では障害のない友人や障害のないアスリート、配偶者・パートナー・子ども、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者が多かった。50～60 歳代では、配偶者・パートナー・子どもが多かった。

〈事例〉

①〈識別番号61〉20 歳代男性。上下肢機能障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ卓球で、その後もパラ卓球を継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はパラ卓球の日本代表選手、パラスポーツ継続時の重要他者は両親だった。

②〈識別番号77〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人と水泳に取り組んでいたが、その後、パラ水泳に転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は、スイミングスクールコーチでもある父親、パラスポーツを継続する際の重要他者は、父親と水泳部のメンバーだった。

③〈識別番号55〉20 歳代女性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前は水泳に取り組んでおり、障害発生後はパラ水泳に取り組み、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は同じ高校水泳部にいた上肢欠損選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は妹だった。

④〈識別番号96〉30 歳代男性。聴覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人とラグビーをやっていたが、その後、デフラグビーに転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はデフラグビーの発起人、パラスポーツを継続する際の重要他者は雇用先だった。

⑤〈識別番号64〉30 歳代女性。頸髄損傷。障害発生年齢は 10 歳代半ば。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は柔道をやっていた。障害発生後は車いすラグビーに出会い、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は車いすラグビーのチームメート、パラスポーツを継続する際の重要他者は雇用先だった。

⑥〈識別番号28〉40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツは車いすバスケットボールで、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は母親、パラスポーツを継続する際の重要他者は競技が異なるがパラクライミング選手や車いすバスケットボールの健常の選手だった。

⑦<識別番号24>40 歳代男性。片大腿切断。障害発生年齢は 10 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は、スノーボードに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は理学療法士、パラスポーツを継続する際の重要他者は健常の選手や教員だった。

⑧<識別番号12>40 歳代男性。脊髄損傷(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはパラアーチェリーで現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はパラアーチェリー選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は地元のアーチェリークラブの関係者や妻だった。

⑨<識別番号7>50 歳代男性。片下肢機能障害。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、パラアーチェリーに出会い、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は会社の同僚、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族やアーチェリークラブの仲間だった。

4.2 障害種別

継続時の重要他者を障害種別にみると、脊髄損傷・頸髄損傷、二分脊椎などでは、配偶者・パートナー・子ども、障害のない友人や障害のないアスリートが多かった。切断や機能障害では、職場(雇用先)関係者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、配偶者・パートナー・子ども、学校関連の指導者が多かった。脳性麻痺では親・兄弟・祖父母が多く、視覚障害では学校関連の指導者、パラスポーツ選手や学校外の仲間、パラスポーツ指導者や競技団体関係者が多かった。

<事例>

①<識別番号82>40 歳代男性。二分脊椎症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

当初は、障害のない人とカヌーに取り組んでいたが、その後、パラカヌーに転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はパラカヌー連盟の知人、パラスポーツを継続する際の重要他者は妻と兄だった。

②〈識別番号3〉60 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B6。

障害発生前はサッカーに取り組んでいた。障害発生後に車いすバスケットボールに取り組み、その後、パラアイスホッケーに転向した。パラスポーツを始める際の重要他者は療養所関係者、パラスポーツを継続する際の重要他者は妻、チームメート、指導者だった。

③〈識別番号48〉20 歳代男性。筋ジストロフィー症(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A1。

初めて出会ったパラスポーツはボッチャで、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は当事者団体の先輩と家族、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族、職場、指導者だった。

④〈識別番号10〉30 歳代女性。片大腿欠損。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンは B4。

障害発生前は水泳に取り組んでいた。障害発生後、パラ水泳に取り組んでいたが、その後、パラトライアスロンに転向した。パラスポーツを始める際の重要他者はパラ水泳の指導者、パラスポーツを継続する際の重要他者は職場、ライバル選手、トライアスロン仲間だった。

⑤〈識別番号16〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A2。

初めて出会ったパラスポーツは車いすバスケットボールで、その後、パラ陸上に転向した。パラスポーツを始める際の重要他者は車いすバスケットボールの選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は特別支援学校の陸上部監督と両親だった。

⑥〈識別番号72〉20 歳代男性。脳性麻痺(先天的障害)。スポーツキャリアパターンは A3。

初めて出会ったスポーツは卓球、その後、パラ卓球に転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は友人と祖父、パラスポーツを継続する際の重要他者はライバル、両親、指導者だった。

⑦〈識別番号85〉40 歳代男性。視覚障害(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA4。

初めて出会ったスポーツは柔道で、その後、パラ柔道に転向、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は特別支援学校の柔道指導者、パラスポーツを継続する際の重要他者は前述の柔道指導者、町道場の指導者、練習仲間だった。

⑧〈識別番号47〉30 歳代男性。視覚障害。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB6。

障害発生前は、野球、バレーボール、陸上などに取り組んだ。障害発生後は、陸上、グランドソフトボールに取り組み、その後、ゴールボールに転向した。パラスポーツを始める際の重要他者は特別支援学校の関係者、パラスポーツを継続する際の重要他者は特別支援学校のゴールボール部顧問、職場の仲間、看護師、行政のスポーツ担当者だった。

4.3 障害発生年齢別

継続時の重要他者を障害発生年齢別にみると、0～5 歳では、親・兄弟・祖父母、パラスポーツ指導者や競技団体関係者、学校関連の指導者、障害のない友人や障害のないアスリート、パラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。6～20 歳では、職場(雇用先)関係者、学校関連の指導者、障害のない友人や障害のないアスリート、が多かった。21 歳以上では配偶者・パートナー・子ども、職場(雇用先)関係者が多かった。

〈事例〉

①〈識別番号4〉20 歳代男性。骨形成不全(先天的障害)。スポーツキャリアパターンはA1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ卓球で、その後も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は母親とパラ卓球関係者、パラスポーツを継続する際の重要他者は亡くなった弟、中学校の卓球指導者、パラ卓球指導者だった。

②<識別番号83>60 歳代女性。右上腕欠損。障害発生年齢は 10 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB1。

初めて出会ったパラスポーツはパラ馬術で、現在も継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は夫と海外のパラ馬術選手、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族、職場関係者、乗馬クラブの仲間だった。

③<識別番号9>40 歳代男性。脊髄損傷。障害発生年齢は 20 歳代前半。スポーツキャリアパターンはB3。

障害発生前は水泳に取り組んでいた。障害発生後、パラ水泳に取り組み、現在もパラ水泳を継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は水泳仲間、メディア、理学療法士、作業療法士、パラスポーツを継続する際の重要他者は水泳仲間、家族だった。

④<識別番号7>50 歳代前半。片下肢機能障害。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B5。

障害発生前は野球に取り組んでいた。障害発生後、パラアーチェリーに取り組み、現在もパラアーチェリーを継続している。パラスポーツを始める際の重要他者は会社の同僚、パラスポーツを継続する際の重要他者は家族、アーチェリークラブの仲間だった。

⑤<識別番号35>40 歳代男性。右足腓骨神経麻痺。障害発生年齢は 20 歳代後半。スポーツキャリアパターンは B3。

障害発生前はスノーボードに取り組んでいた。障害発生後、パラスノーボードに取り組み、現在もパラスノーボードを継続している。パラスポーツを始める際の重要他者はおらず、パラスポーツを継続する際の重要他者は職場、家族、ライバル選手だった。

5. クロス集計

第 1 章第 2 節では、スポーツキャリアパターン(以下、SCP)を下記のとおり、12パターンにまとめている。A1～6を先天的障害、B1～B6を後天的障害としている。

【A1、A2】

A1 は先天的に障害があり、いずれかの時点でパラスポーツとしてスポーツを始め、現在もその競技を行っている人である。A2 は先天的障害者で、いずれかの時点でパラスポーツを始め、その後ほかのスポーツを行うようになり現在に至っている人である。

【A3、A4】

A3、A4 は先天的障害があるものの、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人であり、A3 は現在も同じスポーツ(パラスポーツ)をしている人で、A4 はその後違うパラスポーツをするようになり現在に至っている人である。

【A5、A6】

A5、A6 は先天的障害があるが、A3、A4 と同様に、最初に始めたスポーツはパラスポーツとして実施していたのではなく、障害のない人のスポーツとして実施、その後そのスポーツとは別のスポーツをパラスポーツとして実施するようになった人で、A5 は現在も最初に始めたパラスポーツを実施している人、A6 はその後違うパラスポーツを実施するようになり現在に至っている人である。

【B1、B2】

B1、B2 は後天的に障害を持つようになり、パラスポーツを行うようになるが、障害を持つ前は特にスポーツは実施していなかったパターンである。B1 は最初に始めたパラスポーツを現在も実施している人で、B2 はその後違うスポーツを始め、現在に至っている人である。

【B3、B4】

B3、B4 も後天的障害者である。障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後に障害発生前と同じスポーツをパラスポーツとして行うようになった人で、B3 は現在も同じスポーツをしている人、B4 はその後、違うスポーツを行うようになり、現在に至っている人である。

ある。

【B5、B6】

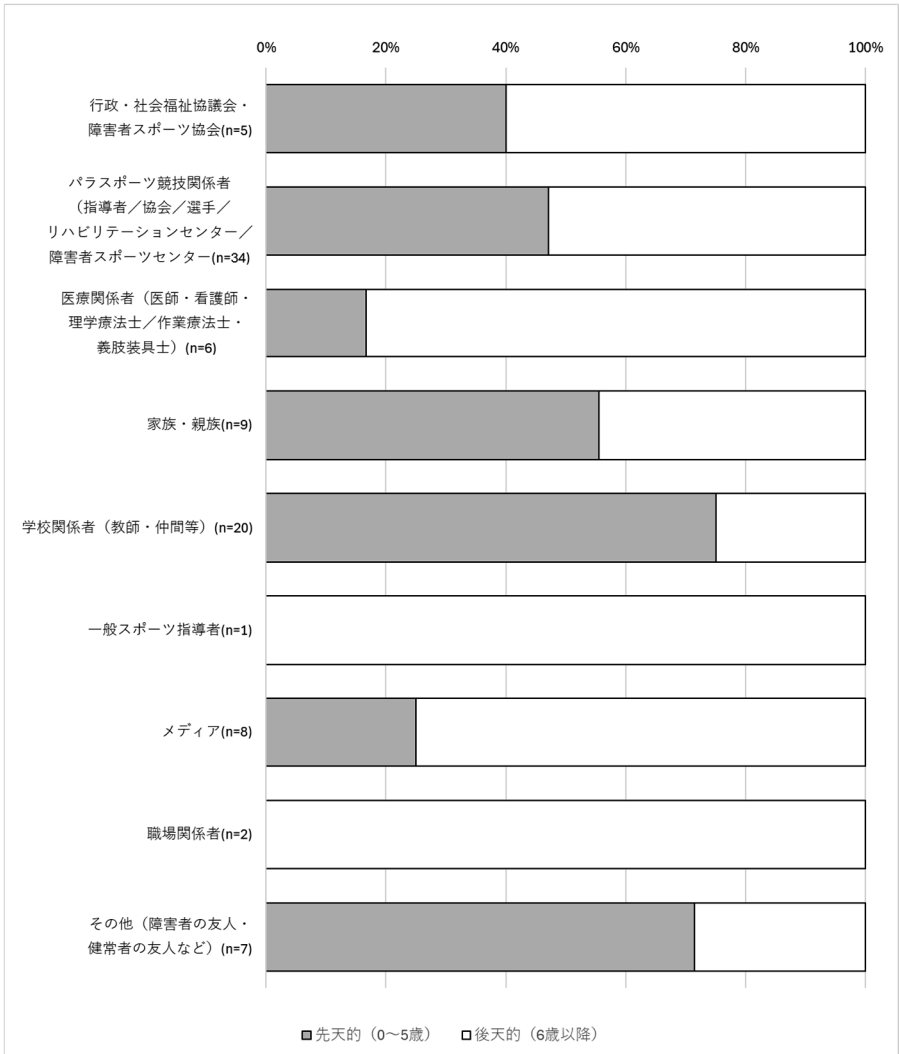
B5、B6 は後天的障害者で、障害発生前からスポーツを実施しており、障害発生後は障害発生前とは違うスポーツをするようになった人で現在もそのスポーツを実施している人が B5、その後異なったスポーツを実施するようになり現在に至っている人が B6 である。

ここでは、先天的障害と後天的障害の二群にわけ、パラスポーツに関する情報提供者、パラスポーツの開始場所、パラスポーツを始める際の重要他者、パラスポーツを継続する際の重要他者についてクロス集計を行った。

5.1 先天的障害・後天的障害別にみるパラスポーツに関する情報提供者

パラスポーツに関する情報提供者を先天的障害・後天的障害別にみると、先天的障害では学校関係者(教師や仲間等)が 75.0%と最も多く、友人(障害の有無を問わない)(71.4%)、家族・親族(55.6%)が続く。後天的障害では医療関係者(医師・看護師・理学療法士／作業療法士・義肢装具士)が 83.3%と最も多く、メディアの 75.0%、行政・社会福祉協議会・障害者スポーツ協会の 60.0%が続く。パラスポーツ競技関係者(指導者・協会・選手・リハビリテーションセンター・障害者スポーツセンター)、家族・親族は、先天的障害、後天的障害で大きな違いはみられなかった。先天的障害では、学校関係者や家族、友人、後天的障害では医療・リハビリテーション関係者が情報提供に関しては大きな役割を果たしていることが分かった。サンプリングをしていないこと及びサンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表 3-1)。

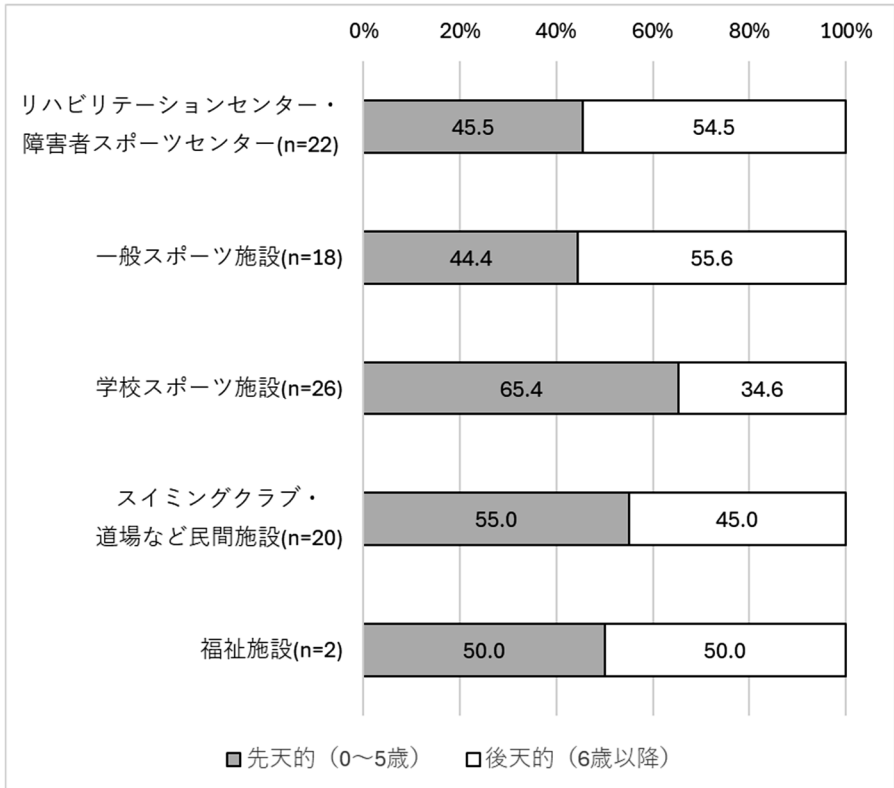
図表 3-1 先天的障害・後天的障害別にみる
パラスポーツに関する情報提供者



5.2 先天性障害・後天的障害別にみる別にみるパラスポーツの開始場所

パラスポーツの開始場所を先天性障害・後天的障害別にみると、先天性障害では学校スポーツ施設が65.4%と最も多かった。リハビリテーションセンター・障害者スポーツセンター、一般スポーツ施設、スイミングクラブ・道場などの民間施設、福祉施設では、先天性障害と後天的障害で大きな違いはみられなかった。サンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表3-2)。

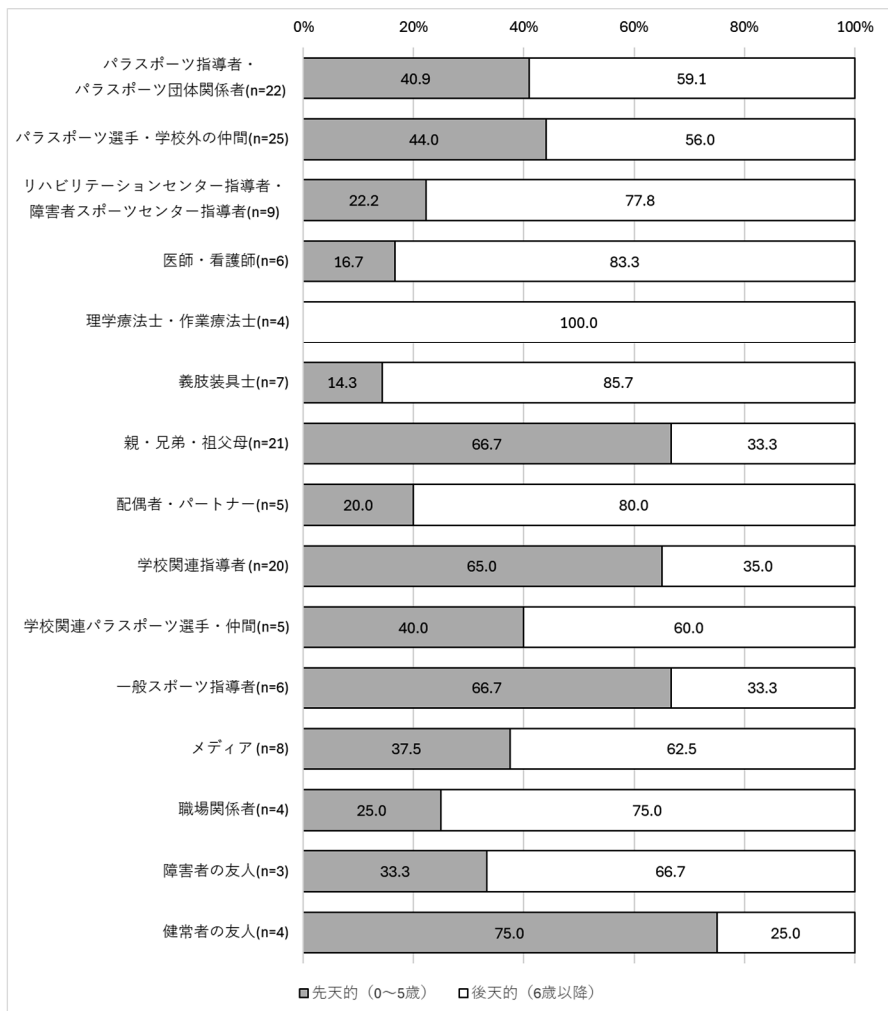
図表3-2 先天性障害・後天的障害別にみるパラスポーツの開始場所



5.3 先天性障害・後天的障害別にみるパラスポーツを開始する際の重要他者

パラスポーツを開始する際の重要他者を先天性障害・後天的障害別にみると、先天性障害では健常者の友人が 75.0%と最も多く、親・兄弟・祖父母(66.7%)、一般スポーツ指導者(66.7%)、学校関連指導者(65.0%)が続く。後天的障害では理学療法士・作業療法士が 100%と最も多く、義肢装具士(85.7%)、医師・看護師(83.3%)、リハビリテーションセンター指導者・障害者スポーツセンター指導者(77.8%)が続く。後天的障害では、医療・リハビリテーション関係者が大きな役割を果たしていることが明らかになった。サンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表 3-3)。

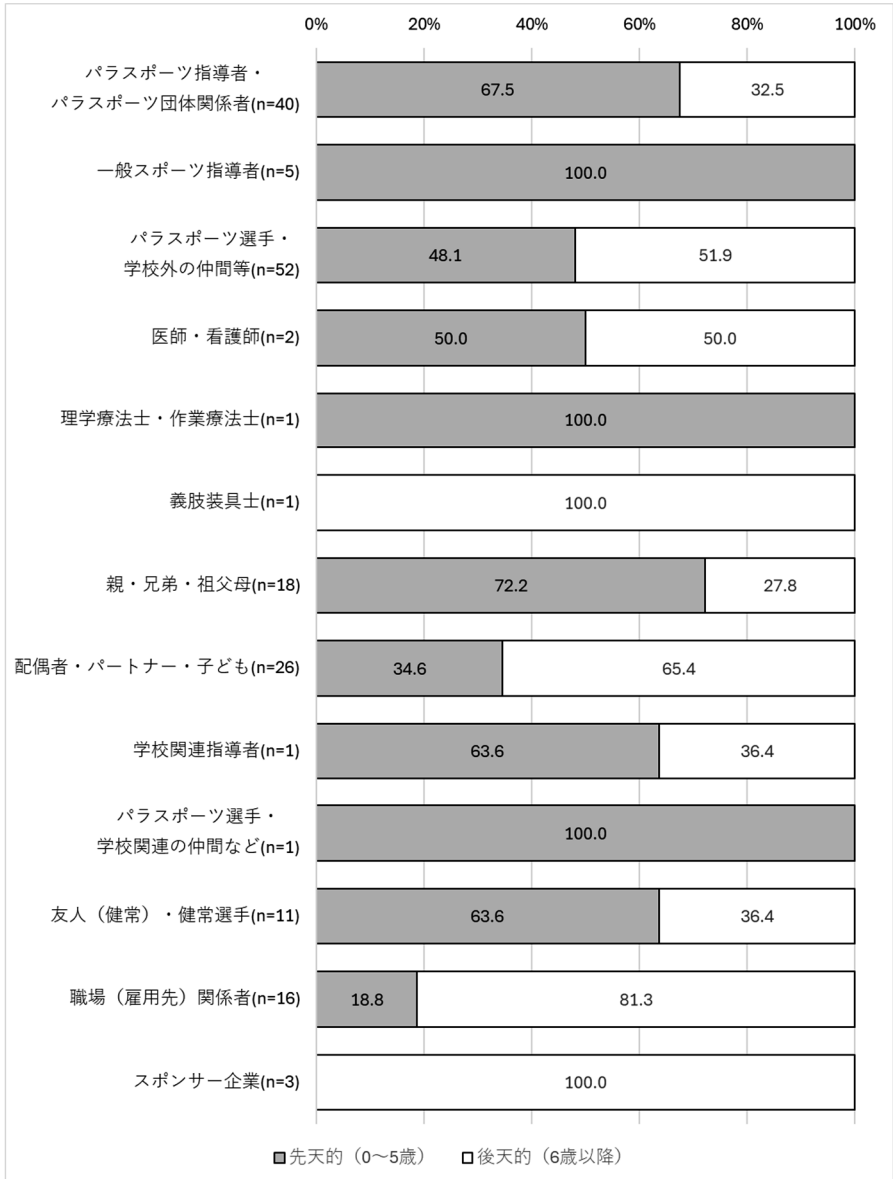
図表 3-3 先天的障害・後天的障害別にみる
パラスポーツを開始する際の重要他者



5.4 先天的障害・後天的障害別にみるパラスポーツを継続する際の重要他者

パラスポーツを継続する際の重要他者について、サンプル数1を除外したうえで先天的障害・後天的障害別にみると、先天的障害では親・兄弟・祖父母が 72.2%と最も多く、パラスポーツ指導者・パラスポーツ団体関係者(67.5%)、障害のない友人や選手(63.6%)が続く。後天的障害ではスポンサー企業が 100.0%と最も多く、ついで職場(雇用先)関係者(81.3%)、配偶者・パートナー・子ども(65.4%)が続く。後天的障害では、スポンサー企業、雇用先が継続する際の大きな要因になっていた。サンプル数が少ない項目もあるため、参考値として図示する(図表3-4)。

図表 3-4 先天的障害・後天的障害別にみる
パラスポーツを継続する際の重要他者



6. まとめと考察

パラスポーツに関する情報提供者は、20～30 歳代ではパラスポーツ関係者や学校関係者、50～60 歳代ではパラスポーツ指導者協議会、パラスポーツ協会、リハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターが多く、年代によって傾向が異なった。2011年のスポーツ基本法制定、2013 年の東京 2020 パラリンピック大会の開催決定を皮切りに、障害者のスポーツ環境はここ 15 年で大きく変化した。パラスポーツに関する情報提供は、これまで障害者スポーツ振興の中心として大きな役割を果たしていたのはパラスポーツ協会、パラスポーツ指導者協議会、障害者スポーツセンターやリハビリテーションセンターなどに限られていたが、障害者のスポーツ環境が変わっていく中で、様々な団体・組織が情報を提供するようになった。そうした背景も年代で傾向が異なっていた要因と推察できる。障害種別でみると、脊髄損傷や二分脊椎症、切断や機能障害などは、パラスポーツ協会、パラスポーツ指導者協議会、パラスポーツ選手、リハビリテーションセンター、障害者スポーツセンターなどのパラスポーツ関係者が多く、これまで専門的知見を蓄積してきた障害者スポーツに専門性を有する団体・組織が、肢体不自由をはじめとした身体障害では大きな役割を果たしていたことが分かる。視覚障害では、教員や学校仲間などの学校関係者が情報提供者になっていた。視覚障害者のスポーツ振興においては、特別支援学校が大きな役割を果たしていると推察できる。先天的障害についても学校関係者がパラスポーツに関する情報提供者であることが多く、視覚障害同様、特別支援学校での情報提供が大きな役割を担っていたと考えられる。

パラスポーツを始める際の重要他者はパラスポーツ選手や学校外の仲間が多かった。年代別でみると、20～30 歳代ではパラスポーツ指導者やパラスポーツ団体が多く、加えて 20 歳代は親・兄弟・祖父母、30 歳代は学校関係者が、特に多かった。視覚障害は学校関係者、先天的障害では学校関係者や家族が、重要他者になっていた。前述したとおり、ここ 15 年で障害者を取り巻くスポーツ環境は大きく変わり、障害当事者に限らず、障害のない人、特に家族や学校関係者の理解が深まった。多くの

関係者がパラスポーツに触れる機会が増えたことにより、障害当事者にとっては、スポーツに接する機会の幅が広がったと考えられる。

パラスポーツの開始場所では、20 歳代はスイミングクラブや道場などの民間施設、30 歳代は学校スポーツ施設、40～60 歳代はリハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターだった。障害発症時期が異なるので、年代別ですべての傾向を推し量るのは難しいが、20 歳代で民間スポーツ施設がパラスポーツの開始場所になっているのは、ここ 15 年の社会的変化が影響していると考えられる。2024 年施行の改正障害者差別解消法では、これまで努力義務とされていた民間事業者による障害のある人への「合理的な配慮」の提供が国や地方自治体同様、法的義務とされた。民間施設における障害者の受け入れ状況が、徐々に変化している兆しと捉えることもできる。障害種別でみると、脊髄損傷や二分脊椎症、切断や機能障害はリハビリテーションセンターや障害者スポーツセンターが多く、パラスポーツに関する情報提供者と密接に関わっていることがわかる。同様に、視覚障害では学校スポーツ施設が開始場所になっており、パラスポーツに関する情報提供やパラスポーツを始める際の重要他者とも密接にかかわっていることが明らかになった。

パラスポーツを継続する際の重要他者は、20～30 歳代では親・兄弟・祖父母の家族が多く、40 歳以上では配偶者・パートナー・子どもが多くなった。障害の有無にかかわらず、20～30 歳代では独身、40 歳以上では既婚が多いと想定した場合、ライフステージの変化にあわせて、同居する家族が変化し、身近にいる人が変わってきていると推察できる。障害種別でみると、脳性麻痺では親・兄弟・祖父母、視覚障害では学校関連の指導者が多かった。先天的障害では親・兄弟・祖父母が継続の際の重要他者になっていた。先天的障害では生まれたときから家族が寄り添っている場合が多く、継続時の重要他者にもなっていると考えられる。

パラスポーツに関する情報提供者、開始場所、開始時重要他者、継続時重要他者などの傾向から、スポーツ開始時のきっかけとその継続にあたっては、いくつかの特徴が明らかになった。

○視覚障害

視覚障害ではパラスポーツに関する情報提供に始まり、パラスポーツを開始する際の重要他者、開始場所、継続する際の重要他者にすべて特別支援学校(盲学校)がかかわっていた。ほかの障害種と比較しても、視覚障害のように一貫して学校が関与している場合は少なく、学校を中心としたスポーツ振興体制は視覚障害独自の体制といえる。

○先天的障害と後天的障害の傾向

先天的障害においては、パラスポーツに関する情報提供は学校関係者、開始する際の重要他者は学校関係者と家族、継続する際の重要他者は家族とパラスポーツ関係者とライフステージに応じて役割が譲渡するような形になった。スポーツを核にしながらかかわるステークホルダーがライフステージに応じて変化するのは、卒業後のスポーツ環境を考えると、理想的な移行の形のひとつといえるだろう。

後天的障害においては、パラスポーツ開始時と継続時に重要他者に変化がみられた。開始時重要他者では、医師・看護師、理学療法士・作業療法士、義肢装具士などの医療・リハビリテーション職の人たちが大きな役割を担っていたが、継続時重要他者では配偶者・パートナー・子どもなどの家族に加えて、スポンサー企業や雇用先が継続する際の後押しをした。本研究のインタビュー対象者は、競技力が高い傾向にあるため、企業のスポンサー支援や選手採用などが継続する際に重要な役割を担っていたと推察できる。

○ライフステージに応じた受入体制の構築

20～30歳代でもライフステージに応じたステークホルダーの変化がみられた。パラスポーツに関する情報提供はパラスポーツ関係者と学校関係者、パラスポーツを開始する際の重要他者は学校関係者と家族、継続する際の重要他者は家族だった。障害発症時期が一律ではないため推察の域を出ないが、学齢期にパラスポーツに出会い、学校関係者や家族が開始する際の重要な役割を果たし、継続する際には家族が重要な役割を担った。ライフステージの変化に合わせて、比重が学校から家族へ移行したといえる。障害児の学校卒業後のスポーツ環境は課題となっているが、現状、家族が継続時の中心的役割を担っていることをふまえ

ると、必ずしも持続可能な環境とはいえない。卒業後を見越して、地域のパラスポーツ関係者が継続時重要他者として役割を果たすことができれば、家族のレスパイトにつながるうえ、障害当事者も家庭以外に居場所を持つことができる。今後、継続的なスポーツ環境に向けては、家族に負担が集中しない形で、地域が受け入れていく体制が構築されることが望ましい。

(第3章担当:小淵和也)